

浜松市長
浜松市教育委員会 御中

いじめ重大事案調査報告書に対する所見

はじめに

浜松市いじめ問題第三者委員会の皆様におかれましては、長期に渡り本事案についての調査、検討をしていただきありがとうございました。本調査結果報告書(以下:答申)を公表するにあたり、所見を述べる機会を賜りましたので、述べさせていただきます。

また、所見を作成するのに大変お時間をいただいたことへのご理解に感謝いたします。

所見

聞き取り調査だけでなく、答申の中でも当時の私の気持ちを汲み取り、いじめ認定がなされていることに少しの救いを感じました。第三者委員会の方々、第三者委員会事務局の方々には、長い時間をかけて調査を行ってくださったことに感謝申し上げます。

第三者委員会は公正・中立な立場で調査を行う機関であることに理解を示したうえで、答申には、事実と異なる点、私自身が把握していることとの相違が多くあるというのも事実です。また、答申において調査が行われたいじめ行為は私が受けたいじめ行為の一部に過ぎないということも加えておきます。

答申P17「本件がいじめの重大事態として深刻化したのはX中の対応によるところが大きいとの結論に至った。」

私は、加害者の特性や教育環境も大いに影響していたと考えています。X中の対応が加害者の行為を助長させたという表現が正しいのではないかと思います。

本当に大人に対しての不満だけであったのか調査において明確にできていたかたかったです。大人の対応がずさんであったことは言うまでもありませんが、そのことを加害者がいじめ行為を行うに至った要因として処理することは、加害者が自分の行為を正当化する逃げ道を作ってしまうことです。

責任能力や、判断能力がまだ未熟な中学生に対して、義務教育の場において、倫理観や道徳的判断力を備えさせることが今後の被害者を減らしていくことにおいて重要だと考えます。

義務教育を行う機関として加害者の行為に対して直接的な指導を行わず、その状態のまま、中学校を卒業させた学校側の過失は大きいと考えます。

今後、倫理観が欠如している、道徳的判断力が乏しい生徒に対しての対応について、専門家の助言を求めるなど、組織的な取り組みの実現を求めます。

X中の対応において問題であったことは、概ね答申のP17～28「X中の体制や対応について」に記載されている通りであると思います。10ページ以上にわたり事態悪化の背景や要因について記されていますが、私はこれらの点において一切謝罪を受けていません。加害者からの謝罪も一度も受けていません。

加害者からの謝罪はもちろんですが、私は大人にしっかりと謝ってほしかった。自分たちの過ちを認めて、心から謝罪をしてほしかった。罪のなすりつけ合いを、私の前で行わないでほしかった。学校はいじめとして対応する姿勢を貫かず、K顧問に責任の一端を押し付け、目の前で行われているいじめ行為を教諭たちが目視しているのにも関わらず、適切な指導を行わず、迅速な対応がされないまま、いたずらに事態を長期化させた。という事実は明白なのです。

ずっと信頼してきた教育の場にいる教諭たちが、いい大人が自分の過ちを認めず、自分にやれることはやっていたと、対応はしていたといつまでも言い訳をし続けている。当事者からすれば何もしてくれなかったのと同じですが、仮になにかアクションを起こしていたとしても、事態の解決に

は至らなかった、むしろ悪化させる対応をしてしまっていたということを私は認めてほしかったです。

答申P2また、P16(1)「生徒Aについて」にもあるように、私は[]部に入部するためにx中学校へ進学しました。技術を向上させたい、試合で結果を出したいという思いを強く持っていました。それ以上にチームメイトと切磋琢磨して大きな達成感を得たいという思いを遥かに強く持っていました。個人の技量はさほど重要なことではなく、チームとして目標に向かって励んでいくことができるチームでプレーする[]が好きでした。散在していた個人が[]を通して一点に集まったときに生まれる大きなうねりがチーム競技の魅力だと思っていました。勝敗で価値を決めるのではなく、その過程を大事にしたいという思いでした。その旨を自分の振る舞いや、言動で伝えているつもりでした。ですが周りの目には私の姿はどう写っていたのでしょうか。個人情報盾に答申が発表されてからも知ることは叶いませんでした。私はただ、周りの子たちと変わらない当たり前の学校生活を送りたかっただけなのです。毎日学校に行き、部活動に励み、勉学に励む。やりたかったことはただそれだけでした。コミュニケーションを取ることは苦手と学校側には解釈されていたようですが、人と話すことも好きでした。自分なりの距離感を掴んで接していて、交友関係でひどく落ち込んだことはありませんでした。私はどうしていれば良かったのでしょうか。どうしていればこんなにも傷つかなくて済んだのでしょうか。私はなにか悪いことをしてしまっていたのでしょうか。その答えを誰にも教えてもらえることなく、謝罪をしてもらうこともなく、私だけが起こったことをすべて受け入れて、納得ができないことも受け入れて、苦しかったことも何事もなかったかのように対応されて、塗炭の苦しみを負わされました。

傷をつけた方は、学習の補習もしてもらい、なんの指導も制裁もなく高校へ進学している。誰かの人生を大きく変えたことなんてすっかり忘れて自由な人生を送っている。

私は一生忘れることなんてできません。かけられた言葉、受けた行為、大人に裏切られた気持ち。今でもずっと囚われてまわりついてくる。

私はもうこの先、浜松の街を安心して出歩くことができません。暮らすこともできません。浜松市は私にとって、生まれ育った馴染みある場所ではなく、恐ろしい記憶を呼び起こす街です。この先二度と関わりたくありません。そうさせたのは、周りにいた大人たちです。謝罪も受けることができず、最後に私に与えられた選択肢はこの所見で気持ちを伝えることだけでした。被害者が所見を書くことでこの重大事案は解決した事案だとみなされるのです。この現状に疑問を持つ人が少しでもいれば、救いです。

この所見を受け取った方たちにはなにか感じるものがあってほしいです。

苦しみを背負っているのは私だけではありません。現在でもいじめやトラブルは至るところで発生しているはずです。

残念ながらそう確信するほど、浜松市の教育への信頼はありません。

問題があった組織は人事異動という形で根本的な解決を行うことなく、本事案の検証もせず、時間だけが過ぎている。

つまり、当事案に関わっていた校長、教頭、生徒指導主事、主幹教諭、学年主任、副顧問は相応の反省がないまま現在も生徒と関わっているということです。

こうした組織が何も変わらないまま、今も同じように被害者だけに負担をかける対応を取っているのではないのでしょうか。この調査が行われている横目でも。その意味を理解していただけているのでしょうか。

膨大な時間と費用を費やして、第三者委員会の調査を行っても、直接生徒や子どもに関わる大人や組織が変わらなければ誰の救いにもならないのです。

本事案に対する調査が行われても、社会が変わった訳でも、誰かを救ったわけでも、何かが変わった訳でもありません。社会の中の不特定な誰かの時間が犠牲になっただけなのです。

時間が経ってしまえば、人の記憶は薄れ、私が知りたかった事実は正しく知ることができなくなってしまいます。

私にとってはなんの意味もありませんでした。何年も待ちましたが、何ひとつ大人も組織も変わっていませんでした。とても残念です。学校に行けなくなってから、3年が経ちました。この答申が出されてからは1年。この答申の発表により本事案が解決するはずがありません。加害者からの謝罪も一度も受けていません。校長や教頭、生徒指導主事、主幹教諭、学年主任、副顧問、真っ当に謝罪をしていただいていません。

私は大人たちへの信頼も、学校教育への信頼もすべて失いました。浜松の街を安心して歩くこともできなくなりました。ですが、誰にもこの責任は取ってもらえません。肩代わりしてもらうこともできません。負担を追っているのはすべて被害者です。奪われた時間も、費やした労力も、背負った過去も元にはもう戻りません。傷つけた加害者は当たり前のように高校受験をして、進学して、なんの苦労もなく普通の生活を送っている。大きな過ちを犯した教諭たちも、なんの責任を追うこともなく、当たり前のように教師を続けていける。人事異動という形で問題があった組織は見かけ上なかったことにされる。被害を受けた方は、何ひとつ忘れることなどできません。何度も何度も思い出して、眠ることができないのに、そんな関係ない顔して加害者は当たり前のように日常を過ごしていける。そんな理不尽を残したまま、本事案は解決したということになって、世間に答申が公表されるのです。

もう私はこれ以上の対応は求めません。謝罪も必要ありません。すぐに認めて謝罪してもらえば、苦痛は和らいでいたかもしれません。もう謝罪を受けたところで何の救いにもなりません。ただ、私が求めるのは、同じようなことを繰り返さないために、関わっていた教諭たちに適切な処分を行い、組織体制を改善し、被害者の人権を守り、加害者にも健全な指導を行うことができる環境を整備することです。

はままつ人づくり未来プランによれば、「未来を創っていく子供たちを、子供たちを取り巻く大人が力を合わせて育てていくこと」を教育理念にするとあります。

この理念達成のためには、大人たちが信頼される存在でなくてはならないのではないのでしょうか。本事案のように重大事案として認定されるのは、毎日のように発生しているトラブルの氷山の一角に過ぎません。すべてのトラブルを未然に防ぐことは難しくても、何かあったときに信頼できる大人が対応できる環境を整えていれば、それだけで救われる人もいます。この現状に本気で向き合ってくれる大人がいれば、それは少しの希望です。

加害者も、教諭たちも、教育委員会の方々にも、足りなかったものは想像力だと思うのです。自分の発言や行動にどんな影響が伴うのか。誰かを傷つける行為にはなっていないか。独りよがりな言動ではないか。個人としても、組織としても、考えることができていなかった。考える力が欠如していた。

言葉や行動を受け取る相手のことを想像して、一人ひとりが自分自身に責任を持ってほしいのです。

この事案のことを決して忘れることはできません。受け入れられないこともあります。だからこそ、誰かを守ることができる大人になれるよう精一杯励みます。傷つける側にならないよう、傷つける側を生み出さないよう私にできることを探していきます。

母や父、家族の存在なくして私はここまで進むことはできませんでした。どんなときも味方でいてくれる人がずっとそばにいてくれました。私はすごく恵まれていると思います。私もそんなふうに誰かの味方でいたいのです。そのために、日々成長を重ね、自分の足でしっかりと歩んで行ける人になりたいと思います。

最後になりますが、一生懸命生きるみなさまが平穏な日々を送っていけることを願い続けます。